飯田市 歴研ニュース
News Letter No.119
The Iida City Institute of Historical Research
2022年8月1日 発行

飯田市歴史研究所
〒395-0803
長野県飯田市鼎下山538
TEL 0265-53-4670
FAX 0265-21-1173
E-mail iihr@city.iida.nagano.jp

第19回飯田市地域史研究集会
満洲移民 ―下伊那から再考する
9月10日（土）・11日（日）
飯田市役所C棟3階会議室 ※オンライン参加も可

資料代：500円（2日間共通）※高校生以下無料
参加方法：①会場での参加（先着50名）
②オンライン参加（定員なし）
関連展示：飯田市立中央・鼎・上郷図書館にて実施

戦時期の国策の下、全国でおよそ30万人が農業移民や青少年義勇軍として満洲（中国東北部）へ向かいました。飯田下伊那からも8,000人余りが海を渡りました。しかし、敗戦後の混乱の中で多くの命が失われ、帰国できた人びともさらに苦難が続きました。
今回の研究集会では、最新の研究成果により、世界やアジア、日本にとって満洲移民とは何であったのかを問い、加害と被害の歴史に向きあい、記憶を継承する意味を考えます。

写真出展：筒井茂實氏提供写真／歴史研究所所蔵

10日（土）10:00～17:00
〈第1部　満洲移民を再考する〉
講演　近代日本の戦争 ―森本州平日記から考える／加藤 陽子（東京大学）
講演　日中戦争下の募集と送出 ―地域指導者と下伊那の人びと／本島 和人（歴史研究所）
報告　下伊那の中の満洲 ―原資料を読み解く／齊藤 俊江（歴史研究所）

11日（日）9:00～15:00
〈自由論題報告〉
報告　明治30年代の飯田町文化の高まり ―歌舞伎座新史料を中心に／竹村 雄次（歴史研究所）
報告　江戸時代後期の伊那地方における離縁と女性／塩澤 元広（高森町歴史民俗資料館）
〈第2部　満洲移民と向きあう〉
報告　満洲体験が人生の指針に ―看護師として生きる／橋本 珠子（満洲移民体験者）
報告　沈黙を聴く ―ドキュメンタリーの現場から／手塚 孝典（信越放送）
報告　想起と対話の「場」―記念館レポート／三沢 亜紀（満蒙開拓平和記念館）

お申込みは、電話、FAX、メールのいずれかで、参加方法とご連絡先をお知らせください。
申込締切：会場は9月8日（木）、オンラインは8月31日（水）
※オンライン参加の方は専用サイトからもお申込みいただけます。
https://form.run/@iihr2022sympo

新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、変更が生じる場合があります。

ワークショップ
「コロナ禍のなかから生存の歴史を問う」を開催しました

ワークショップ会場

本ワークショップは、６月18日（土）午後２時から４時30分まで、飯田市竜丘公民館にて、開催されました。「生存の歴史」とは、人々が人間らしく生きるために、いかに生活し、人間関係を結び、社会を形成してきたのかを探ることです。田中の問題提起では、コロナ禍のなかで、生存の条件の中心領域にあたる医療保健福祉分野の脆弱化が顕在化している状況のなかで、現在から遡及して、生存の歴史を探るために、『生存の地域史をかたる』（2022年３月刊行）を素材として、出産と家族、共生、地方自治をめぐる論点を提起しました。

本書の５人の語り手と８人の聞き手に感想・意見を出していただきました。語り手の側は、遠山で教育懇談会に関わった片町国臣さん、在宅福祉を拓いてきた片桐秀人さん、ブラジルから来日した長沼映子さん、満洲引き揚げ体験を経て、看護師となった橋本珠子さん、住民主体の保健実践を行ってきた何原弓紘さんでした。

コメントとして、安岡健一さん（大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻）からは人々を結ぶ対話の重要性、ケア専門職が個別の人を対象とする「アート」であること、現代史の重要性等、同じく山川みやえさん（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）からは、当事者の主観的意識やナラティブの重要性等が指摘されました。さらに、参加者からは座光寺の聞き書き本との交流や、歴史教育の側からの課題、戦争の歴史を地域から問うことなどが意見交換されました。

田中から「結び」として、現代を生きる人々は誰しも「生きづらさ」を抱えざるをえないが、社会的分断を乗り越えて連帯し、生命を守り、地域を守っていくために、本書を素材として、対話を拡げていきたいとしました。

田中雅孝（歴史研究所特任研究員）

ワークショップ
「書評会　本島和人著『満洲移民・青少年義勇軍の研究』」を開催しました

調査研究員の本島和人さんが刊行した『満洲移民・青少年義勇軍の研究』（吉川弘文館、2021年）の書評会を７月２日（土）午後２時から４時15分まで、上郷公民館にて、ワークショップ形式で開催しました。４人の報告者が分担して内容紹介・意見提起などを行い、３人がコメントする形式です。その後、著者を交えて議論を行いました。本書は、飯田下伊那からなぜ多くの人々が農業移民として満洲に渡らねばならなかったのか、そして犠牲にならなければならなかったのかを、特に送出過程に着目し、多くの役場文書や聞き取りも活用しながら分析しています。書評会では、本書の４～６章を占める川路地区からの満洲移民の送出過程についての分析や、二・四事件の位置づけなどについて活発に意見交換がなされました。

会場とオンラインを併用した形式で開催し、
多くの皆様にご参加いただきました

コメンテーターとして参加いただいた立命館大学の細谷亨さんからは、本書は飯田下伊那地域を分析対象として、現在の満洲移民研究の到達点を示すものである、というコメントがありました。今年９月に開催予定の研究集会では、満洲移民がテーマとなります。飯田下伊那の歴史を考えるうえで非常に重要なテーマの一つですので、今後も様々な形で研究や議論が進められて行くことを願っています。

太田仙一（歴史研究所研究員）

ミニ リレーエッセイ㉕

「学びとは何か」という問い

多和田 真理子（國學院大学准教授／歴史研究所調査研究員）

飯田市歴史研究所には、2008年3月まで常勤の調査研究員として勤務しておりました。その間に生まれた息子は今年16歳になりました。調査にもよく同行させ、多くの方にお世話になりました。現在私は、教職志望の学生たちに「学びとは何か」を教える立場にありますが、この問いを日々鮮烈に突きつけてくるのは、この息子の存在です。

幼い頃の息子は、毎日朝から晩まで公園から離れず遊びまくっていました。遊具やボール遊び、鬼ごっこなどを繰り返しながら、まさに非認知能力（遊びの経験から培われる、粘り強さや忍耐力、自制心、創造力、コミュニケーション能力など）を身につけていたように思います。親も1日中公園から離れられないのでグッタリしつつ、「遊びの中に学びがある」とはこういうことかと感動しました。

私たちの教育観はあまりにも学校教育の存在を前提にしており、遊びの中に教科学習を見つけようとしがちです（「お買い物ごっこで計算の力が身につく」など）。あるいは、非認知能力を単に学力（認知能力）を身につけるための準備として捉えがちです。しかし子どもにとって遊ぶことは生きることであって、そこで培われる力そのものが学びであり、何かを学ぶために遊んでいるわけではないのです。

私の研究テーマは、飯田下伊那の近代における学校の設置運営と地域とのかかわりです。それは近代学校教育が地域において定着し、当たり前のものになっていく過程でもあります。しかし、学校教育は学びのあり方のひとつにすぎません。人々が生きることそのものの中にある学びにも目を向けてこそ、学校の設置運営における人々の関わりを考察することができるのです。つまり私は、歴史を通して「学びとは何か」という問いに向き合っているのだなと最近あらためて感じています。

研究紹介 地図史料からみる遠山の農業景観

遠山谷の歴史的景観を研究するために、旧上村・旧南信濃村の役場文書の絵地図史料の調査を行いました。これをもとに下栗地区の興味深い土地利用の事例を紹介します。

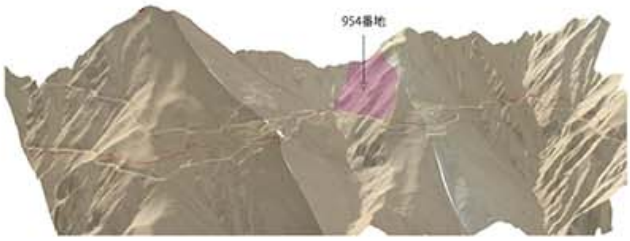

図1

下栗地区が含まれる旧上村の地図については、旧南信濃村役場史料に、明治23年頃に調製された「製図者　河合繁吉」の署名入りの上村地図（A）が約19点、旧上村役場史料に、大正～昭和初期の年代と推測される上村地図（B）が52点保管されています。これに加えて、下栗地区では、野牧権家所蔵文書のなかに明治初期の地引絵図が発見されるため、共通の地番を手掛かりに、当時の土地利用の豊富な情報が得られます。

試しに下栗本村から北東約2kmの位置にある山腹斜面の954番地を見てみましょう（図1）。先述の上村地図（B）では、4つに分筆されており、954-1、954-2、954-4は「山林」、小区画の954-３が「畑」と記されています。ところが、分筆前の上村地図（A）をみると、954番はすべて「畑」となっており、一見すると矛盾します。しかし、ここに野牧家文書の地引絵図から954番地を探し出すと、954番イ号が「原野」、同ロ号が「焼畑」と記されていたことがわかります。おそらくこの地引絵図の記述がもっとも実態に即しており、山林の一部を切り開いて焼畑営農していたものが、明治期に誤って広大な「畑」として登記されてしまったのではないでしょうか。

福村任生（歴史研究所研究員）

飯田アカデミア2022 第93講座

私流 歴史の本のつくり方 ―編集者として考えてきたこと―

講師 井上 一夫（いのうえ かずお）さん
（元岩波書店取締役）

日時 10月1日（土）

第1講 13:30～15:00
原典を編むということ
―読める史料集とは

第2講 15:20～16:50
歴史を読み取り伝える
―岩波新書の編集作法

会場 飯田市役所C棟3階C311～313会議室

資料代 500円 ※高校生以下無料

申込み ※1講義のみでもご参加いただけます。
①会場での受講（定員40名）②ご自宅等でのオンライン受講のどちらかでご参加いただけます。
いずれも、9月20日（火）までにお電話（0265-53-4670）でお申込みください。その際に受講方法等についてご案内させていただきます。

講師より

わたしはあるときから、学術教養出版社がめざすべきは二つに収斂されるのではないかと思うようになりました。ひとつは「残す言葉を選び抜く」であり、いまひとつは「届くかたちを編み出す」。これは濃淡の差こそあれ、すべての出版物が備えるべき二つの要素ではないかと。

たとえ人気が無くても（あるいは人気が無いからこそ）、出すべきものがあり、そのとき可能な限りわかりやすく、がんばれば読めるように工夫する努力がなされなければならない。また、いかに引く手あまたであっても（それだけ求める人が多いわけですが）、しかるべきメッセージが込められていなければならない。その緊張感が本の質を決めるのではないか。ひそかにそう思っていました。

わたしが岩波書店に入ったのは1973年。すでに刊行中だった「日本思想大系」に配属され、以後10年にわたって携わります（校正3年編集7年）。学術教養とは何かを考えるにあたって、このときの経験がいかに貴重だったか、あとで何度も思い返すことになりました。これは「残す言葉」を編む作業であり、そのとき考えた工夫は「日本近代思想大系」につながります。

そして岩波新書では、主として日本史関係書目を企画編集し、「届くかたち」の追求が大きな課題になりました。ちなみにこのとき、それまでの新書イメージとは違う性格のものもつくっていて（永六輔『大往生』、阿久悠『書下ろし歌謡曲』、山藤章二『似顔絵』、鈴木敏夫『仕事道楽』等々）、言葉を届かせるうえでのさまざまなヒントを得ています。

本は一冊一冊が個性的なものであり、本来、一般化できるものではありません。したがってこの講義では、大きく網をかけたうえで、私なりに感じてきたことを具体例に即してお話ししていきたいと思っています。何かしらヒントになるものがあれば幸甚。

定例研究会

歌舞伎座新史料から見えてきた明治30年代の飯田町文化

報告者：竹村雄次（歴史研究所特任研究員）

開催日：8月6日（土）
時間：14:00～16:00
会場：歴史研究所 研修室
※聴講をご希望の方はお電話ください

受講生募集！ 歴研ゼミ＆ワークショップ 8月・9月の予定

会場：歴史研究所 研修室

建築史ゼミ
担当：福村任生（研究員）
8月19日／9月16日
（第3金曜日）19:00～21:00

近世史ゼミ
担当：羽田真也（研究員）
8月10日・24日／9月14日・28日
（第2・第4水曜日）18:30～20:30

近現代史ゼミ
担当：田中雅孝（特任研究員）
8月27日／9月24日
（第4土曜日）10:00～11:40
※今年度から月1回となります

思想史ワークショップ
市民の皆さんが自主的に学び合う場
8月3日・17日／9月7日・21日
（第1・第3水曜日）19:00～21:00

満洲移民研究ゼミ
担当：本島和人（調査研究員）
齊藤俊江（調査研究員）
第127回 8月6日／第128回 9月10・11日
※9月は研究集会参加（1面参照）
（第1土曜日）10:00～11:40

地域史ゼミ
担当：太田仙一（研究員）
8月12日／9月9日
（第2金曜日）18:30～20:30

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL：0265 - 53 - 4670

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱・咳などの症状のある方やマスクを着用されない方の受講はご遠慮ください。また、今後の感染状況により、延期または中止、会場の変更、参加者の制限をする場合がありますのであらかじめご了承ください。開催日の1週間前に開催可否を判断します。

開所時間：午前9時～午後5時　休所日：日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日
メール配信への切り替えをご希望の方は、E-mail: iihr@city.iida.nagano.jp まで